

1-7

演題	『苦しみ』と『やすらぎ』に向き合う
副題	～「痛み」のサインから学んだ看取り介護～

下肢の壊死
かりんとう

法人名	社会福祉法人 母子育成会
施設名	特別養護老人ホームしゃんぐりら

発表者名 (職種)	近藤 海璃 介護職員
共同発表者	吉澤 友彬
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	川崎市幸区東小倉 6-1
TEL	044-520-3860
FAX	044-520-3861
メールアドレス	s-guri@gf.netyou.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	特別養護老人ホーム しゃんぐりら(平成16年4月開所) 別館(平成24年3月開所) 多 少室184床 ユニット型特養4ユニット36床 ショートステイ10床 川崎市内で一番大 きな施設です。平成24年に看取り介護を開始しています。
---------------------------	--

研究の目的、PRポイント

コロナ禍の看取り介護で、家族の面会時に「本人はかりんとうが好きだった」と情報が得られて、嗜好を知ることが出来た。結果として、かりんとうを食べる事は出来なかった。どのような支援があれば、最期のときまで好きだった『かりんとうを食べる』ことができたのか、考えさせられる看取り介護であった。

取り組んだ課題

- ・ 糖尿病を患っている利用者様で、食事はDM食1200～1400kcalで提供していた。生活内では「好きな物を食べる」という嗜好に合わせた飲食、楽しみを持つことが難しい状態であった。
- ・ 閉塞性(へいそくせい)動脈(どうみゃく)硬化症(こうかしょう)の進行による、両足趾(りょうそくし)壊死が拡大していき、疼痛緩和で鎮痛剤を内服しながら、壊死による感染予防のために清潔保持と処置を行ってきた。
- ・ 日常生活のなかで、「壊死の処置」をする時間は、職員を叩く、抓るなどの抵抗感もあった。その苦痛に感じる時間は毎日続いていた。看取り介護が開始となって、苦痛を伴う時間を補えるための、生活の「楽しみ」を模索していくことが、今回の事例では課題であった。

具体的な取り組み

- ・ 家族との面会を機に、本人が好まれていた飲食、趣味、人柄について家族から聞き取りを行うことが出来た。
- ・ 「かりんとうなど甘い物が好きだった」という家族の話から、甘味料のゼリーやはちみつ、チョコソースを提供して、好きな物を口で味わうように、食の楽しみを支援していった。
- ・ 嗜好品である「かりんとう」については、介護職で『食べられない物』という認識で提供することはなかった。

活動の成果と評価

壊死の処置中は「叩く」「抓る」「嘔みつく」「叫ぶ」といった行為が、見られていた。この痛みを訴える行為こそが、本人の活力の現れでもあり、日に日に弱々しくなっていくこれらの行為が、死期が迫っていることを感じさせる瞬間でもあった。本人が好んでいた「かりんとう」は、嚥下機能の低下から誤嚥を起こすリスクを考えて、「食べられない物」と認識してしまった。介護職の気付き、柔軟な発想から味わう、食感を楽しむための工夫が出来なかった。今までの暮らしの中で『楽しんでいたこと』を最期のその時まで支援することが出来れば、よりその人らしい「いつかの日常」を感じて頂けたのではないだろうかと思っている。

今後の課題

- ① 情報共有と他職種協働(チームケア)
今回の事例のように、「かりんとう」を味わってもらえる工夫は、介護士だけでなく、看護師や相談員、栄養士と専門性を活かすことで、「食感を楽しむ」「味わう」「香りを感じる」など出来ることはあったと思う。多職種というチームケアを活かして、最期のときを迎えるまで、気持ちが穏やかでいられる支援をしていきたい。
- ② 看取り介護を考える
終末期という言葉もあり、看取り介護ではその人の最期の時間を強く意識してしまう。しかし、本当に大事なのは「その人の今まで(日常)」であり、たとえ好きなものを健康上の理由で制限してきた人でも、最期は好きなものを、楽しみのある日常に戻ることが出来る。看取り介護とは自分らしくいられる最後のチャンスなのだと思います。